

経験の記述：働きの存在論：ドゥルーズ・ガタリとオートポイエシスの分岐(1)

著者名(日)	稲垣 諭
雑誌名	「エコ・フィロソフィ」研究
号	6
ページ	91-107
発行年	2012-03
URL	http://doi.org/10.34428/00003440



経験の記述—働きの存在論

ドゥルーズ・ガタリとオートポイエーシスの分岐 (1)

文学部 稲垣論

キーワード：働き、ネットワーク化、アンリ、ドゥルーズ・ガタリ、偶然性、間接性、現実、境界

1. 働きの存在論

働き/作動(working)、力(force)、操作(operation)、運動(movement)。これらの経験は、対象のように見ることができず、ただ対象とともに感じ取られている。現実的には経験という語の限界に触れてしまう境界事例でもある。一切の物性を欠いた運動を思い描いてみる。ゆらゆらと何らかのうごめきをイメージするかぎり、そこにはすでに物性が関与している。物性を欠いた運動はどのように明示できるのか。光は運動しているが、光の運動を経験しようとする途端に困惑する。光速度は毎秒およそ 30 万 km であることから、地球上のスケールにとどまるかぎり、気づいたときにはすでに光は到達し、充滿している。仮に光速度を毎秒 30cm ほどに遅延させる空間媒質があり、そのような媒質に満たされた暗闇の中で電燈のスイッチを入れると何が起こるのか。何かが見えているかぎり、すでに光は到達しているのだから、まったく見えない段階が持続した後に、光源を中心に同心円状に突如ものが見え始めるのであろうか。とはいえ観察者がその円の外にいる場合、光はすぐには到達しないのだから円状に広がる空間を見ることはできない。それに対して観察者が内部にいる場合、その位置に応じて光の到達配置は変化し、さらに物体に吸収され、あるいは反射する光の散乱も毎秒 30 cm の速度で関与するため、光が一律の円状に広がることもない。また光と同じ速度で並走した場合、光はどのように見えるのか。これはアインシュタインが立てた問いの変形である。ここでの経験は、物が運動すると同時に、視空間全体が蠟燭の炎のように揺らめく奇妙な空間体験となると予想されるが、光の条件を変化させることでどうにか触れることができる光の働きの一端でもある。

働きも運動も、ふつうは物性ととともに物性に帰着させえないものとして感じ取られている。見られたコップではなく、コップを見ている働きは見えず、消化の働きもそれ自体は見ることができない。胃は蠕動し、消化液を分泌することで内容物を消化する。消化前と消化後の内容物は対照ができ、その内容物の変化を通じて獲得されるエネルギー量と代謝されたエネルギー量の計測、化学成分の差異から、消化の働きについて理解することもできる。それが一般に「機能性」の特定と呼ばれる。消化、生殖、呼吸、代謝のそれぞれが生体の固有機能として特定されうる。この機能とは、日本語では訳語が区別されているが、関数 (function) のことに他ならず、初期値と結果との対応性が保証されるものの総称である。初期値と結果の間には、多様な働きのプロセスが介在する。たとえば消化において

も、マクロレベルの食物の運動、化学反応、神経系の電位変化、分子レベルの運動と揺らぎ、それに応じた熱の移動といった多様な働きが介在するが、それら働きそのものは初期値にも結果にも現れない。「消化力」という語を導入しても事態が判明になる訳ではない。「力」の概念を、質量とのかかわりで最初に定義づけたのはニュートンであるが、周知のようにそれは、力と質量の相互規定という循環定義においてであり、力そのものを明示することは現代物理学においても困難を極め続けている。以下では、このような見えないものとしての働きと、そのネットワークを最大限に活用する仕方のポイントをいくつか絞り、それを念頭に置きながら、哲学的議論とともに見えてくる働きの存在論の基礎固めを行いたいと考えている。とりわけ本稿ではドゥルーズ・ガタリの哲学的試みを参照に、オートポイエーシスとの接点を浮き彫りにする。

①ネットワークの維持

「供給」という働きについて考えてみる。311の大震災後まず問題になったのは、サプライチェーンの途絶であった。陸路そのものが閉ざされただけではなく、被災地の中小工場の現状把握ができず、工場復旧の見通しを立てるということが、そもそもどうすれば現実化しうるのが分からないほどの凄惨さを極めた。さらには、そうした事態を見越したうえでの代替的な供給のネットワークが確保されていなかったために、製造業者に商品化の遅延にもとづく多大な損益が生まれた。とりわけ車や精密機器の部品の供給に多くの支障が出た。とはいえ陸路があり、物品が確保されていれば、供給という働きが成立するわけでもない。現にガソリンを輸送するタンク車が被災地に入らないという問題も一時期生じた。かろうじて陸路は復旧し、ガソリンという支援物質も輸送車両もあるのに、放射能にまつわる風評のために被災地へ入ろうとする人員がいなくなり、立ち往生したのである。こうした事例には、働きのネットワークがどのような条件を通じて立ち上がるのかを見通す困難さが示されている。

供給されるべき多くの物品や輸送ルート、輸送手段、人員が、供給という働きそのものを維持しているのは確かだが、それらのほとんどは代替可能でもあるのだから、それぞれは逆に「供給という働き」に巻き込まれることで初めて固有の価値を発揮する。そのため、輸送費のコスト削減や、部品の代替不可能な機能性（技術的ニッチ）を開発しようとする各種企業体の努力は、他同業者と競っているように見えて、実際のところ供給のネットワークにとにかく参与し、そのネットの広範で安定した活用を望んでいるだけである。大手宅配業者は、たとえばスキー場にスキー一式を送ったり、生ものや要冷蔵のものまでも宅配のネットワークに乗せてしまうことで、新たな供給のネットワークを生み出してきた。つまり、これまで誰も送ろうとはしなかったものを宅配の新たな選択肢として組み込み、需要そのものを作り上げたのである。ということは供給という働きは、そのときそのときのニー

ズに適うものを供給し続けば済むということではなさそうである。むしろ一度確立された供給のネットワークを作動させつつも、同時にニーズそのものの更新に応じた新たな供給ネットワークの開発が要求され、それが付帯的にネットワークの自在さと柔軟さを生み出すロバストな仕組みとなることが分かる。精密機器の末端のたった一つの部品を製作している中小工場の中には、自社で作られる部品が出荷後どのような製品に組み込まれ、商品化されるのかほとんど理解していないこともあると思われる。さらには、現在必要とされている供給網以外に、今後どのような需要が生じて、自社の部品が別種の供給ネットワークを構築するのかさえ分からない。その場合、既存の供給ネットワークに参与するだけではなく、新たな供給網の形成に開かれた商品販売こそが対外的戦略となる。製品にはいつでも、多様な活用可能性が見込まれるような余白を残したデザインが要求される。

ミクログリアという免疫細胞の一種は、脳内で中枢神経系のシナプスのネットワークを監視していることが分かってきた。シナプス結合を行っている神経細胞の周囲を徘徊し、時に接触する。そして障害された結合を消去するだけではなく、健全なシナプスも消去し、その後回復させるようなことも行われる。外的に見れば、ネットワークの頑健性や柔軟性を試しているとしか思えない。つまり、既存のネットワークをあえて阻害することで何が起こるのかをシミュレートしている。ということは、ネットワークのハブになるような回路、つまりそれが消去されることで機能実行に多大な弊害が起きそうな部位の削除は、シミュレート上では避けられていると思われる。だとすれば、そうしたミクログリアの動向から、機能性の優位なネットワークとその配置が、観察的精度が上がれば今後予測できる可能性が高い。

②新規ネットワークの立ち上げ

自然エネルギーの活用法のひとつとして、「浸透膜発電」という方式が確立されつつある。塩分を通さない半透膜を用いて海水と淡水を仕切ると、濃度差を解消するための水の動きが生じ、その水圧を用いて発電が可能となる。海水と淡水が自然に混ざりあう河口等では、エントロピー増大の運動がそのつど起きている。おのずと生じているこのエントロピーの落差を電気エネルギーに変換してしまうのである。大型の海水淡水化施設では、淡水化に応じて大量の濃縮海水が発生する。その海水を浸透膜を通して淡水に再度混ぜるさい、浸透圧は最大 60 気圧に達するようである。ただし発電量が最大になるのは、その半分の 30 気圧であり、それは 300 メートルの高低差を活用する水力発電並みの効果をもつことが試算されている¹。発電コストも太陽光発電より 40 円ほど安く、風力発電と同程度であるらしい。さらには風力のように天候に影響されることも少ない。仮にこうした発電システムが

¹ たとえば、「原発 6 基分の潜在力『浸透圧発電』とは 海水と淡水を使った実証実験に成功」、『日経ビジネス ONLINE』2011 年、9 月 13 日配信記事参照。今後の改善点としては、浸透膜に付着する不純物の除去を、電力コストをかけずに行うことが挙げられている。

整備されると、国単位でみた場合、河川の多さが国の豊かさの一つの指標となる。この事例では、水の混合という働きの発見と活用に応じて、資金や人が巻き込まれる働きのネットワークが順次立ち上がることになる。もともと淡水化で生じた濃縮海水は、そのままでは生態系に害を与えることから直接海にも排出できないゴミであった。これまでは海水を再び淡水によって薄めてから海に流していたのである。この例でも分かるように、それ以前には活用できなかったものを、どうすれば社会的に有効な機能性を発揮する新たな働きのネットワークとして抽出し、立ち上げることができるかが、その後の事業展開につながる分岐ポイントとなる。目下、大量の放射性瓦礫がゴミの最たるものであるのは確かである。現在ではどこに輸送し、貯蔵し、リスク管理するかが問題になっており、その活用法が見出されるような段階にはない。

③ネットワークとそこへと介在する自在さ（ケイパビリティ）

タンザニアにあるヴィクトリア湖ではナイルパーチ漁業が盛んである²。その魚の白身はEUや日本といった先進各国に高値で売れるため、ヴィクトリア湖周辺はこの漁業が街の活性化に一役買っている。とはいえ、そこの住民はナイルパーチを食べて生活しているわけではない。彼らの大半が食するのは、加工後の魚の骨や皮といった残飯である。したがって豊富な資源があれば、裕福であるという訳でもない。アフリカはレアメタルやレアアースの多くが眠る資源大国でもある。にもかかわらず、南北問題として取り上げられる最貧国の多くがアフリカにある。たとえ資源があったとしても、それら資源を必要とする文化的水準に達しておらず、それら資源を採掘し、精錬し、加工するための技術がない場合、当事国にとっては資源という言葉そのものが空転し、気づくことのないまま搾取が継続される。センのケイパビリティ（潜在能力）は、資源や資金の豊かさによって人々の生活水準をとらえるのではなく、「健康であること(Health Promotion)」や「学校に通うこと」といった社会的機能のネットワークを自分で選択し、組織化するという選択肢の多様さの指標である。そのため場合によっては、健康をあえて損ねることや、持っているお金を道端に捨てられるかといったことまでもが、当人の自由度や豊かさを測る指標となりうる。最貧国と呼ばれる国における労働にまつわる働きのネットワークの多くは、先進国から外挿され、固定化されたネットワークに他ならず、当事国の国民がそのネットワークへの参与を選択できるようにはなっていない可能性が高い。あるいは最低限の生活か、死かという強制された選択の二極化にすぎず、自国の生活水準の発展可能性へと柔軟に拡張される働きのネットワークとして機能しているようには思えない。

² DVD 作品『ダーウィンの悪夢』（フーベルト・ザウバー監督、2004）。

④ネットワークの複合連動化

供給という働きのネットワークは、需要とのバランスのもとで成立しているだけではなく、様々な外的要因も関連することで維持されている。新たなネットワークの立ち上げは、既存のネットワークに接続されたり、場合によっては既存のネットワークそのものを消滅させたりもする。トウモロコシを原料とするバイオエタノールは、一時期急に注目され、そこへと参入する農家がどっと増えた。そのことが既存の家畜の餌の供給ネットワークを弱めることで、餌の価格が高騰し、結果として食材の価格の高騰にまで連動した。実際バイオエタノールはトウモロコシ以外のものでも代用でき、さらにその需要が供給を凌駕するほど一挙に高まったわけではなかったにもかかわらずである。

人間の極端に両極化する心理として、躊躇することなく新規なものやそのネットワークの構築に参入する方向へ動いてしまう傾向と、既存の安定的なネットワークだけをとにかく維持しようと努める傾向とがあるのは確かである。関税撤廃の議論が持ち上がったときの、是が非でもそれを食い止めようとする農業関係者の動向を見ているとそれはよく分かる。その他方で同時に、IT技術を用いながら農産物に新たな情報付加価値をもたせ、特殊な加工を施すことで流通のネットワークを新たに立ち上げてしまう農業関係者がいるのも確かである。前者は、関税撤廃とともに日本の農業は衰退すると主張し、後者はアイデア次第でこれまで以上の生産体制を構築できると主張する。こうした場合、両者の言い分の共通項は、農業の衰退を止めることであり、そのためのやり方に関してだけ食い違いが出ている。前者は、そのやり方は関税をかけ続けることだけだと主張し、後者はそれ以外のやり方でも農業は展開でき、現にそれを実行している。だとすれば問題となっているのは、政府の関税をめぐる諸外国との関係調整とは独立に、多くの農業関係者が農業体制の新たな組織化のきっかけを見出すことができる情報ネットワークの構築およびそのコンサルタントに関わるインフラ整備である。そしてそのように理解した場合、これまでの政策の多くは、関税にしろ、減反にしろ、一度構築された供給ネットワークを堅持に維持し続ける方へとドライブを切る戦略であったことが明確になる。つまりそうした政策が実行されたさいには、ネットワークの閉鎖的な持続可能性だけが見込まれているのであって、その「展開可能性」、参入の選択的「自在さ」、他のネットワークとの「複合化」が視野に入られて組み立てられてはいないのである。

2. 参照項としての働きを起点とする哲学（アンリの内的生）

これまでの論点の提起は、働きを起点に、それがどのように現実世界でネットワーク化し、その組織化のパターンを自在に変えながら展開できるのかが焦点となっている。このような現実世界での働きの出現とネットワークの成立を、哲学のオーソドックスな議論とリンクさせようとすると、非常に強引な印象を与えざるをえない。確かに哲学の議論でもこれまで、モノの個体化や主体の形成、主体間の関係性の形成、それと相即する世界とのかかわりの形成といった問題群において働きの出現が議

論されてはいた。しかしそこでは、働きの出現からネットワークが立ち上がり、それがシステムの安定性を確保し、さらには変化や展開可能性を組み込むと同時に、別様な働きの出現に連結されるといったことが、明示されることはほとんどなかった。

たとえば、後期のハイデガーを通じて現象学が「現れないもの」の探究へと向かったことは周知のことである。現れは意識の現実ではあるが、意識能作によって現れが成立しているわけではない。この意識からは独立の「現象化の働き」そのものが、哲学的探究の焦点となったのである。そのさい、現れない経験位相の参照項となり、対照となり、往々にして批判すべき標的になったのが、「現れるもの」として理解されてきた認知的、表象的志向性とその対象群である。この点は、生の現象学を主導するアンリにおいて特に顕著になる。アンリが目指した「内的生」は、それ自体現れないまま、現れの機構そのものを貫き、支えている生の充実であり、その働きである。『精神分析の系譜』においてアンリは、生の働きそれ自体が、歴史上の「現れの論理（脱立 extasis の論理）」のうちに、どのように回収され、歪曲され、見失われてしまったのかを、デカルト、カント、ショーペンハウアー、ハイデガー、ニーチェ、フロイトのテキストを丹念に読み込みながら描き出そうとしている³。

生それ自体は、どんなに厳密な思考論理を用いていようと、気を抜くと一挙に脱線し、生の脱立的思惟となるか、あるいは生が脱立的思惟に従属させられてしまう。この著作でのアンリの主張は、この一点のみである。問題となっているのは、「生それ自体」と、「生の表象、生の認識、生の外在化」との差異であり、突き詰めれば「生」と「生の脱立」との差異である。生はみずから自身を一貫して感じ取るだけであって、それは思考せず、想起せず、みずからを脱することもない。アンリの根元的現象学がこの試みを通して到達する地点は、現れないもの（非現象性）における以下の二つの区別である。つまり、「脱立的な表象に従属した地平の有限性としての非現象性」か、「生そのものの非現象性」かである。アンリ本人の言葉では、「どの意識内容も直観や明証の『現在』を離れると、もはや潜在的な表象にすぎなくなって不可避免的に沈んでいくあの闇のことであるのか、それとも反対に、原理上、脱-立の光を嫌う生そのものを指していたのか」⁴ということになる。

またこの差異は、デカルトにおいては思惟（コギト）と思惟の情感性（内感）の差異として、ハイデガーにおいては脱立（外在化）と存在の開性の受容の差異として、カントにおいては内感（脱立）と超越論的自我の現実存在（生）の差異として、ショーペンハウアーにおいては表象に従属する意志（表象的身体）と力としての意志の差異として、ニーチェにおいては生の病と、超力としての生との差異というように容易にパラフレーズ可能であり、フロイトにおいても無意識の二つのモードの差異として解釈されている。ここまでくれば、うんざりするほどパターン化された思索の読み込みであると素直に思える。確かに、生の働きという現象しえないものの場所をとにかく指定しようとするアン

³ M.アンリ：『精神分析の系譜—失われた始源』（山形頼洋他訳、法政大学出版会、1993）。

⁴ 同上、458 頁以下。

リの努力は敬服に値する。にもかかわらず、生からの脱立こそがさまざまなモードをもって現実世界を多様にしているのは事実であり、その脱立の運動と生そのものの運動にはどのような連関があり、そこにはどれほどの連結の度合いや質の変化が含まれているのかは、アンリの探究からは明示されえない。

アンリは脱立的思惟を放棄することによって、「新しい広大な領野の解明」が行えると述べている⁵。しかしそのアンリの生に関わる記述とは、以下のようなものばかりである。「そこではなにひとつ脱—存せず、すべては生の内在のうちで自己自身の内に安らっている」。「生は、自ら自身を被ることにおける、自己の本源的感情である」。「生を生たらしめている生の本源的で無条件の永遠の自己内到達こそが、本源的に無条件に価値を有し、このように価値あるものという資格で、およそ可能な価値評価ならびに諸価値いっさいの原理を構成している」⁶。

こうした生の記述からどのようにして、新しい広大な領野へと探究は前進するというのだろうか。多くの場合、こうした絶対性を指標する生の自己確信は、その確信の強さに見合う経験事例を恣意的に探し出し、それを用いて原理の正当化に力を注ぎやすい⁷。また仮にそうであるとすれば、アンリ哲学の核心は、脱立的な思惟を延々と迂回し、その外在性を次々と暴露していく最中でかすかに感じ取られる、決して顕現化することのない内的生の感触に驚愕し、陶醉し、そこに安泰することであるように思える。ただしそんなことだけであれば、哲学である必要はない。ともかくこうした議論が、生の働きを解明する哲学的な経験記述のひとつであることは確かである。そしてこうした働きの解明（生の働き）が、前述した現実の働きのネットワークの問題とつながる道筋がほとんどないことも上述したとおりである。おそらく働きを起点とする現実の形成について、私たちは新たに学ぶ必要があるのである。

3. 働きを通じた現実形成のタイプドゥルーズ・ガタリの経験

実のところ、現れないものへ迫ろうとするハイデガーやアンリの現象学的探究においては、感情系の働きが現れないものの領域にそっと措定されていることが分かる⁸。気分や情態性による世界の開

⁵ 同上、262 頁。「ショーペンハウアーが初めて主題化する根本的諸問題は、なぜ新しい広大な領野の解明ではなく、袋小路に通じるような仕方で主題化されるのか。われわれは今やこれを理解することができる。その主たる理由は、情感性を形相的理解の対象にする際の出発点になるべき本質が、実は生の本質に、すなわち、情感性そのものと同一である生の本源的自己・触発に求められるのではなく、われわれがその存在者的概念と呼んだもの、すなわち、…欲望として縮小された生の把握に求められることにある」。

⁶ 同上、359 頁。

⁷ 哲学が陥りやすい罠については、拙書『リハビリテーションの哲学あるいは哲学のリハビリテーション』（春風社、2012）、191 頁以下参照。

⁸ 感情、情動系を通じた表象的经验の基礎づけは、哲学史上繰り返し現れ、現在においても活用されている。ハイデガーは特に前期から中期にかけてその傾向が強かった。ハイデガー：『存在と時間』（原

示も、自己触発する情感性としての生の充足も、広義の感情系の働きだからである。こうした図式を格子として、歴史的、社会的な働きのネットワークの基層で働く感情・欲動系の運動を指摘し、それを通じて現実形成が行われるという議論を組み立てることもできれば、個的主体の人格形成の最中で働く欲動や感情を取り出し、そこから病態の解釈もできる。前者の典型はニーチェの意志概念に見られ、後者の典型はフロイトの無意識概念の展開に他ならない。とはいえ、こうした感情系の働きは、ドゥルーズ・ガタリに倣えば、パラノイア的な意味づけの過剰とひとつとなった経験の運動の回路に陥りやすい。そこでは見えないものというどこか深遠な場所が捏造され、それに基礎づけられるようにして経験の安定化や病理化が図られる。場合によってこの図式は、「欠如の理論」として逆説的に捉えることも可能である。たとえばアンリの場合、生それ自体の充足の真裏に、表象における生の不在、生の脱落が理論的に不可欠に組み込まれている。内的生がほとんど内実を欠き、記述の吟味の効かないものであるとすれば、それは不在の象徴的シニフィアン（記号）にすぎない⁹。

この安定化には、論理的で意味的な整合性をまといつつも、揺るぎなさの感情が伴っている。あるいは深遠なものに触れるという陶酔的な満足感も含まれる。そして、この安定化と充足の感情が、大木を支える樹木の根のように世界現出の土台となれば、それはドゥルーズ・ガタリが告発する「樹木モデル」の成立となる¹⁰。樹木モデルは、構造的統一性、客観的基礎づけ、有意味性、統計的規則性、家族主義、それに由来する罪責感といったものの偏重一切を包括する。この地平から見れば、同一的客観性を指標とする実証自然科学も、それを主体的経験ないし存在的経験から批判的に発掘する現象学も同じ穴のムジナである¹¹。このタイプの理論構築は、安定している経験に対する事後的な必要条件の炙り出しが主な仕事となり、超越論的哲学では経験の可能性の条件抽出となり、フロイトの場合は性的欲動の抑圧に基づく病態解釈となる。

ドゥルーズ・ガタリが「樹木モデル」に対して「リゾームモデル」を持ち出すのは、意味や主体、物語（オイディプス）を媒介することで経験に過不足ない説明を与え、たとえ病的であれ経験を安定

佑編訳、中央公論社、1980)、または拙論:「遭遇、パトス、神—出来事の記述と記述という出来事—」、『現象学年報 26号』、31-35頁参照。

⁹ G.ドゥルーズ、F.ガタリ:『アンチ・オイディプス 下』(宇野邦一訳、河出文庫、2006)、175頁以下参照。「構造が形成され出現するのは、欠如として定義される象徴的項との関連においてのみである。非人間的な性としての大いなる<他者>は、表象において、常に欠如する項、あまりにも人間的な性、モル的な去勢のファルスとしての大いなる<他者>のシニフィアンに席を譲りわたす」。

¹⁰ ドゥルーズのハイデガーに対する態度はそれほど明確ではないが、ハイデガーがドイツ語とギリシア語を相互に陥入させ合い、意味を動揺させ、新しい言語を創造しようとしていたことには、単なる「言葉遊び」以上のものがあることを認めてはいる。G.ドゥルーズ:『批評と臨床』(守中高明・谷昌親訳、河出文庫、2010)、190頁以下参照。

¹¹ 「フッサールは発生のことを考えてはいるが、必然的に『パラドックス的』で厳密に言えば『同定可能ではない』(自己同一性も自己自身の起源もない) 審級から出発するのではなく、反対に、任意のすべての対象の同一性を説明する任務を負わされた常識[共通感覚]なる根源的能力と、任意の対象の限らない道程の過程を説明する任務を負わされた良識的能力から出発するのは明らかである」。G.ドゥルーズ:『意味の論理学』(小泉義之訳、河出文庫、2007) 179頁参照。

させるのではなく、意味化や主体化、物語化といった、それ自体は同一的ではない経験を統一化させ、固定させる働きとしてのプロセスそのものを変形し、問い詰める中から、世界の断片を拾い上げるためである。安定した根をもつ樹木は見晴らしの良い風景を経験に与えるのに対し、地中深くに錯綜し、迷走するリゾームは、経験の振動に応じて風景を瞬間的に刷新しつづける。暗がりを一歩進むごとに無数の入り口が立ち現れ、どこからそこに辿り着いたのかの道筋も分からなくなる。それがリゾーム的経験のイメージである。

確かにドゥルーズ・ガタリも二項的な対立図式を執拗に用いてはいる。しかしその戦略の力点は、アンリのように見えない生の働きを、形骸化した生を迂回しつつ暗示することではなく、生そのものの働きに入り込み、そこからどれほど多様な二項対立が生み出されてくるのか、そして二項対立そのものを複数化し多様化することで生そのものがどのように変化するのか、その現場を取り押さえることにある¹²。しかも生の働きそのものの変化が示されて初めて、戦略の有効さが問われるような仕組みも取り入れようとしている。そうしたリゾーム化する多様性としてドゥルーズ・ガタリが採用する世界の記述モデルの典型が、ミクロ物理学における「分子運動」である。分子運動は、統計的規則に応じた挙動を示すモルの運動とは異なる。真冬に暖炉で温めた部屋の窓を開ければ、大気の運動が生まれ、室温は外気温に近づいていく。空気の流れは、気温差を埋めるように行われる。これが統計熱力学によって明らかにされるエントロピーの増大であり、モルの運動である。それに対して分子運動は、ブラウンの洞察以降、統計的処理を介さないかぎりは一切の規則が見出せないランダムネスの世界である。つまり、空気を構成する分子群は気温差を埋めるという規則に従って運動してはいない。徹底化された細分化は、細分化の果てで規則を欠いたまま永久運動する世界の出現に立ち会うことになる。人間の体も、人間によって作られる機械も、分子から成立しており、そのつど観察者によって総体として括られる分子運動の集合に他ならない。ここは「ミクロ物理学的なもの」と生物学的なものが区別されない領域であり、ここでは生物の中にもろもろの機械が存在するように、機械の中にもろもろの生物が存在する¹³。

ドゥルーズ・ガタリは、こうした分子運動に世界の記述の出発点を見出そうとしている。この分子運動は、現象学的な明証性に照らした場合、決して到達できない疑似明証世界であり、構築された理念の衣である。それは知覚することも、感覚することもできず、自然主義的態度を取ることによって科学者が初めて見出す、現象学的明証性から抜け落ちた超越対象に他ならないのである。とはいえ、超越論的经验が一点の曇りもない純粋経験に到達できないのは、不断の分子運動が身体の物性を貫いているからである。こうした世界の現実には迫れないのは現象学の限界であり、ひとつの哲学的態度に囚われた自覚なき自閉である。この点でドゥルーズ・ガタリは、現象学の無能さと手を切り、それを飛び越えていく。そしてその選択こそが、働きを起点とする新たな世界経験の記述を可能にする手がかりの

¹² F.ドス：『ドゥルーズとガタリ 交差的評伝』（杉村昌昭訳、河出書房新社、2009）参照。

¹³ G.ドゥルーズ、F.ガタリ：前掲書、下巻、2006、135 頁。

発見につながると確信する。

①偶然性と間接性

分子運動を起点とすると、現実世界で見出される規則のほとんどは、統計的、確率的有意性をもつものにすぎず、その限りでその規則が原因となって結果が引き起こされることはない。事後的因果は、現実形成そのものの条件にはなりえない。世界の運動は、あらかじめ存在する規則に適合するようにして起こる訳ではないからである。働きとしての「形成」、「生産」を見出すには、原因—結果というカテゴリーでは足りないのである。というのもそのカテゴリーに内的にかかわる偶然性こそが問題の焦点だからである。

キネシンというタンパク質の一種がある。ATP を加水分解しながら細胞内の微小管に沿って運動する性質をもつことから、筋繊維を制御するミオシンと並んでモータータンパク質と呼ばれている。それは細胞分裂や軸索輸送といった細胞内の物質運搬システムの形成にとって欠かせないタンパク質である。分子量からいえば約 12 万の重鎖 2 本と、約 6 万の軽鎖 2 本からなる。このキネシンは微小管上で ATP と結合することで、足状の形態を変化させる。この変化は微小管を形成するチューブリンからの離脱とともに行われ、それとともに足状の形態が前方に折れ曲がる。その後、ATP が ADP に変わり、ADP そのものが放出されることで、再び折れ曲がった足がチューブリンに吸引される。この ATP/ADP の結合と解離の繰り返しを通じてキネシンは微小管上をまるで歩行するか、滑るかのよう移動し、様々な物質を輸送する。分子モーターと言われる所以である。

とはいえ、高分子にすぎないこのキネシンは、輸送すべきものや輸送先、輸送方法を知っていたりする可能性はなく、自ら動くという生物に固有な運動能力が備わっているわけでもない。ATP の結合によってチューブリンから離れた足状分子に実際起こっていることは、ランダムに動き回る周囲の水分子から滅多打ちにされながら、その衝撃の総和に応じて、前後左右どこかへの傾きがおのずと強められるということである。水分子の衝突の中で、キネシンが前方に進めるかどうかはあらかじめ決められてはいる。現実にはキネシンの中には後退したり、一歩も動くこともなく停滞し、振動し続けるものも多数いる。つまり「輸送」という働きは、分子や遺伝子といった物質にあらかじめ刻まれているものではなく、1000 のキネシン分子のうち、統計的な有意性を占める 6 割から 7 割ほどの分子が前方に駆動できたさいに、それが「輸送」の実現と呼ばれているにすぎない¹⁴。分子モーターといっても、車のエンジンのようにモーターが内蔵されているわけではないのである。

ここが、ドゥルーズ・ガタリが「偶然の領域」¹⁵と呼び、モノーが「無根拠性」¹⁶と呼んだミクロ物理学の現実世界であり、機能は、運動するものにとって常に遅れて、そして間接的に出現する。分

¹⁴ M.ホウ:『ミドルワールド 動き続ける物質と生命の起源』(三井恵津子訳、紀伊国屋書店、2009) 参照。

¹⁵ G.ドゥルーズ、F.ガタリ:前掲書、下巻、2006、140 頁。

¹⁶ J.モノー:『偶然と必然』(渡辺格・村上光彦訳、みすず書房、1972)、89 頁。

子世界ではランダム性の中にさまざまな偏りが繰り返し生み出される。つまり、ランダムであるにもかかわらず、なぜか一定の偏向が生じてしまうのである。ここにはシステムそのものの立ち上がりという問題が現れており、この「偏ったランダム性」がキネシンの輸送機能を支えているのはすでに精度の高い知見である。実際、キネシン分子を光ピンセットを用いて引っ張り負荷を与えると、この偏りが消失し、完全にランダムな挙動しかなくなるが、光ピンセットを外すと一方向運動が間もなく再開される。

ドゥルーズ・ガタリは、このようなランダムな運動から出現する「偏り＝動的編成」という現象をミクロ物理学から借用し、それをマクロな歴史や社会、主体性といった多様な経験の運動の起こりに重ね合わせていく。そこで出現してくるのが、統計的、統一的（有機的）、主体的、モル的な「パラノイア型の現実形成」と、不規則的、非有機的、前人称的、前個体的、分子的な「分裂病型の現実形成」の差異である¹⁷。「人間の根底にはそれ〔エス〕がある。つまり、もろもろの分裂症細胞、分裂分子、それらの隠語が存在する。ここにはまさに分裂症の生物学があり、分子生物学はそれ自身、分裂症的なのである（ミクロ物理学と同じように）。ところが、逆に、分裂症、そして分裂症理論も、生物学的であり、生物文化的なのである」¹⁸。

先に見たように、キネシンは自ら自身や自らとは異なるものによって直接的に操作されてはいない。機能の実現には分子運動のランダムネスが内的に介在し、この徹底的な間接性が因果そのものを貫いている。そして、そのようにして一切の事象世界をとらえてみるのである。私が手を動かす際に、私の思考と身体運動の間には何段階もの間接的、分子の手續きが介在し、知人が私の発言をきっかけに席を立つ際にも、無数の間接的手續きが介在する。「手がぶつかってコップが倒れた」という因果的事実認定は、完全に誤っているか、簡略化されすぎているのである。というより、その簡略化そのものが、社会性を虚構し、歴史性を改竄してきたのであり、そこに固有の人間と人間の思考の病を見るのである。そのさい重要なのは、致命的なほど簡略化された世界記述の裏側に、どれほどの間接的手續きが新たに発見されうるのかである¹⁹。

②欲望、集合的記憶、二重作動

ドゥルーズ・ガタリが用いる「機械」という概念は、ガタリ由来のものであるが、「欲望」や「記憶」、「無意識」といった、これまで優れて主体化されてきた概念を動揺させるために用いられている。欲望する機械、機械の記憶、機械状無意識という学術的意味の矛盾的、無意味的使用法を駆使しながら、主体化以前の固有な経験の運動を指し示そうとしている。「ひとたび、機械の構造的統一性が粉

¹⁷ G.ドゥルーズ、F.ガタリ：前掲書、下巻、2006、128 頁以下及び、その図を参照。

¹⁸ G.ドゥルーズ、F.ガタリ：前掲書、下巻、2006、141 頁。

¹⁹ 荒川修作、M.ギンズ：『死ぬのは法律違反です』（河本英夫・稲垣論訳、春秋社、2007）における建築における手續きとしての間接性の活用も参照。

砕され、またひとたび生物の個体的かつ特有的統一性が拒否されてしまうと、機械と欲望との間に直接の結びつきが現れ、機械は欲望の核心に入り込み、欲望するものとなり、欲望は機械状になる。欲望が主体の中にあるのではなく機械が欲望の中にあるのだ。一残滓としての主体が別の側に、この機械の傍に、その周囲全体にある。それは諸機械の寄生物、機械化された脊椎動物の欲望の付属品なのである」²⁰。

キネシンの分子マシンは、生物の中の機械（無生物）であるが、キネシン自体はタンパク質であるかぎりすでに有機化された生命の一部である。それは分子の不断の運動とともにそれとして現れてしまう偶然性に貫かれた偏りである。したがって、その偏りはいつでも変異し、別の偏りに取って代わられてしまう。だからといって、正当な偏りがある訳でもなく、それ自体としては故障することもありえない。「欲望機械とはどのようなものか、次のように説明できる。まずそれは形成する機械であって、その故障さえも機能的であり、その機能は形成の働きと識別されない」²¹。

分子の欲望やタンパク質の欲望についてどのように語ればよいのか。そもそも分子には個性がない。それぞれは区別されず、ただ絶え間なくランダムに運動を行うため、それぞれの位置を指定することもできない。この局面では統計処理を介さないかぎり、規則性と呼ばれるものは一切取り出せない。しかし分子量が万単位で化合し、ポリマーという高分子の有機化合物（炭素化合物）が出現すると、途端にそれぞれの個性性を通じて多様な機能が発揮されるようになる。DNA や RNA の核酸も、タンパク質もその例証である。水分子が、直径 1 ナノメートルの 10 分の 1 ほどの大きさしかないのに対して、DNA のらせん状のヌクレオチドは引き延ばすと 1 ミリを超えるほどの大きさをもつ。その意味でも高分子はすでに巨人級である。それが通常は、細胞核に浸された水の中で直径数十ナノメートルの球状に折りたたまれている。この高分子の「折りたたみ (folding)」を 1950 年代に最初に明らかにしたのは化学者アンフィンゼンである。残基数が 100 以下の小型タンパク質は、加熱されたり、未知の培養液等に入れられると、長く伸びきった鎖状に変化するが、もとの培養液に戻すと 1 秒以内に正確に以前と同じ形態に折りたたまれる。電位やエネルギーの安定的な形態配置パターンは無数に存在するはずなのに、なぜか「変性状態」から「自然状態(native state)」に一意的に戻ってしまう。残基数が少ないものでは、「中間形態」がほとんど存在しないようである。そうした現象を発見したアンフィンゼンは、タンパク質があたかも記憶をもち、以前の形を求めているかのようであると感想をもらしている²²。

折りたたまれたタンパク質の三次元的配置の形成は、そのまま機能性の発現となる²³。ドゥルーズ・

²⁰ G.ドゥルーズ、F.ガタリ：前掲書、下巻、2006、134 頁。

²¹ G.ドゥルーズ、F.ガタリ：前掲書、下巻、2006、136 頁。

²² M.ホウ：前掲書、2009 参照。

²³ G.ドゥルーズ、F.ガタリ：『千のプラトーン 上』（田中敏彦・豊崎光一他訳、河出文庫、2010）、103 頁も参照。

ガタリでは、こうした事態が表現と内容を媒介して現実を多様化する「二重分節」と言われ、河本では行為という特質そのものから「二重作動」と呼ばれる²⁴。つまり形態の獲得が、同時に機能性の発露となる現実が存在し、二つの間には因果的にも、意味的にも、論理的にも対応関係を明示することができない。たとえば、タンパク質の一種であるフマラーゼという酵素は、フマル酸をリンゴ酸にする加水反応を触媒する²⁵。この反応は酸素呼吸を行う生物にとって重要なクエン酸回路の一部をなしている。とはいえこのフマラーゼは、フマル酸の幾何異性体であるマレイン酸にはまったく反応しない。幾何異性体とは、原子の組成式は等しくても、炭素骨格の方向性が異なるため、三次元空間内では重なり合うことのないポリマー対のことである。高分子の空間的配置の違いだけが、化学反応の選択性を生み出している。そこにはなぜその形態がその機能性をもつのかという理由も、根拠も存在しないまま、現実世界の化学的变化をおのずと調整してしまう。またたとえば、DNA の遺伝情報を翻訳するための 64 パターンの組み合わせをもつコドンが、20 種類のアミノ酸にしか対応しておらず、その 20 種類のアミノ酸から生体タンパク質のほとんどすべてが作られることにも、理由や意味づけがあるわけではない。ということは、こうした形態と機能の選択的パターン化が維持されつづける保証も根拠も本来どこにもないことになる。

現在わかっている触媒、生体構造形成、情報伝達、運動、栄養の貯蔵、輸送、蛍光といったタンパク質の機能性には、それ固有の分子形態が対応しているが、この立体構造は、それ自体では何の意味もなさない。つまり二重作動には、作動に対応する環境がそのつど浸透していなければならない。キネシン（輸送）やフマラーゼ（触媒）が機能性を発揮できるのは、輸送のためのチューブリンや、触媒される別のタンパク質、およびタンパク質を浸している内部環境の諸条件が巨大パズルのような複雑な分子的配置と運動の只中にあるときだけである。その意味でも分子的記憶はそれ自体集合的であり、集合的にのみ獲得されてきたものであり、その巨大パズルの微視的变化に応じて、繰り返し再編されうるような記憶である。

こうした場面での「記憶」の働きは、意味由来のものでも、外的に挿入される物語的過去でもない。運動の反復に応じて細かな差異が生まれ、それが起動しやすさ、速度の調整、リズム的な同期を多様化する「手続き記憶」的なものに近い。ホメオパシーという疑似医療の一種がある。現在でも砂糖水に様々な成分を混ぜ、それを極度に希釈することで治療薬が処方されている。レメディと呼ばれるこの処方薬は、成分の入った水を 100 倍に希釈するような作業を何十回と試みることで作られるが、そこまで希釈をくりかえすとすでにただの水に戻っている。しかしそうであってもその水には、物質がそこを潜り抜けたという記憶が残っていると主張されてきた²⁶。

ここでの水の記憶は、現代科学では信じるに値しないものではある。だからといって分子的記憶が

²⁴ G.ドゥルーズ、F.ガタリ：前掲書、上巻、2010、103 頁、及び河本英夫：『システム現象学』（新曜社、2006）、398 頁以下参照。

²⁵ これはモノーが提示した有名な例である。J.モノー：前掲書 1972、57 頁以下参照。

²⁶ S.シン、E.エルンスト：『代替医療のトリック』（青木薫訳、新潮社、2010）130 頁以下参照。

ありえないことにはならない。タンパク質の個体化やその化学反応の選択性、機能性の持続、変異等による機能性の再編には、記憶と呼んでもよいほどの集合的働きとその組織化が関与している。選択性が発現するということには、観察者にとって明確な選択が取り押さえられる前段階で、分子的運動の変異とパターン化が起きているという仮説が含まれる。まだ未解明の部分が多い狂牛病として知られる BSE は、病原菌やウイルスによってではなく、タンパク質であるプリオンの立体構造が変異し、正常なプリオンが異常プリオンに置き換えられていくことによって起こると言われている。一面真っ白だったオセロ盤が徐々に黒に反転していくように、それまでの形態と機能群が別の形態と機能群へと変化するものであり、そこでは分子的記憶の新たな編成が生じている。

通常、異常形態をもつすべてのタンパク質が何らかの機能性を獲得するわけではない。その大半は、機能性を失うか、他のタンパク質との結合ができないまま分解されるか、特殊機能性を発揮しても、それが持続的に再生産されることなく消失してしまう。選択性から機能性へと進む前段階で、おそらく膨大な変異形が、既存のタンパク質の集合的働きのネットワークに間接的に影響を及ぼしており、それら多くの変異形が除去されていても、除去というプロセスそのものの履歴でさえも次の選択性の出現に関与すると予想される。ここで問題になっている記憶は、手触りや感触、予感、余韻、引っ掛かり、緊張、緩和、運動リズムといったものとともに出現する、どこまでも離散的な強度として現実化する記憶である。それは、「偏り」と呼べるほどの強い方向性をもつ働きが発現する以前の経験位相である。形態の微細で連続的な変化は、新たな機能の出現に非連続に結合し、その機能性の発現が形態の配置それ自体に再度影響を与える。二重作動のモードの切り替えには、記憶の再編とそのタイミングが同時に関係している。

それと同じように分裂性経験では、周囲のだれもが理解できず、本人すらも理解できない記憶の再編が行われている可能性が高い。ひとつの出来事をきっかけとして、本人がかかわる世界と、世界についての記憶のすべてが新たな配置に置き換えられ、本人の行為連関一切が別の現実へと接続されていく。こうしたきっかけの典型が「声」であることはこれまでも様々に語られてきた。分裂性妄想では、自分の内省的声か他人の声でもあり、それはいつでも自分への指令語として行為の誘発を内在させる。主体が語るのではなく、集団が主体において語りを支配する。そのとき言表は、私が直接語るものではなく、私において集団が語るという間接的なものとなる。「間接話法は主語を区別することによって説明されない。この言説の中に自由に現れるものとしてのアレンジメント（編成）こそ、一つの声の中に出現するあらゆる声、シャルリュスの独白の中の若い娘たちの歓声、一つの言葉の中の無数の指令語を説明するものだ。『サムの息子』というアメリカの殺人鬼は、祖先の声に煽動されて殺人を犯したが、この声は一匹の犬の声を通じてやってきた」²⁷。分子的経験と分裂性経験を、記憶の編成および再編として直結させること、それはすなわち、行為や運動、記憶の働きの微細な変化

²⁷ G.ドゥルーズ、F.ガタリ：前掲書、上巻、2010、173 頁。

が、機能性ネットワークの質的な転換につながってしまう場所を指定することでもある。そのさいの作業仮説が「無意識の中には、もろもろの個体群、集団、そして機械しか存在しない」というものである²⁸。

③働きと境界形成

ドゥルーズ・ガタリが企てた重要な論点のひとつとして、現実の出現という出来事に含まれる、現実そのものの境界の形成を組み込んだことが挙げられる。つまり物の形態や、統一的、客観 的意味を通じた境界（認識論的境界）ではなく、働きのさなかに出現する境界区分（領土化）および、維持された境界の解除（脱領土化）、別の境界形成への進展（再領土化）を、観察記述とは独立の現実記述に取り入れたのである。分子的記憶の再編は、機能性を包括する働きのネットワークの立ち上がりを貫く現実の境界の変更とともに遂行されるが、それは観察記述からのズレを多分に含みこむものである。

ドゥルーズ・ガタリが境界設定の事例として頻用するのは、蘭と雀蜂とのかかわりである。種子植物の生殖の働きは、受精にかかわる器官としての構造部位、花粉、大気組成、風力や湿度、温度、そして花粉を運ぶ昆虫とともに成立する。ひとつの働きが多くのを巻き込む形で実現される。この「巻き込み」という表現は、それぞれがその働きを実現することを目指しているわけではないにもかかわらず、働きそのものを付随的、間接的に駆動させてしまうことを意味する。蘭の生殖のネットワークと雀蜂の食糧確保のネットワークはそれと気づかずに交差している。雀蜂は蘭の生殖のネットワークに組み込まれ、逆に蘭は雀蜂の群れの生存を維持することに貢献している。しかしここでの関係を、「相互恩恵」といった安易な言葉で理解してはいけない。蘭が雀蜂に感謝することも、雀蜂が蘭にお礼回りすることもありえないことであり、彼らがそもそも働きを意識的に実行しているとは思えない。むしろこの事例も分子的運動の派生形のひとつである。蘭は自前の生殖器官をもちながら、同時に自らで生殖することができない。「植物のテーマ、すなわち花々の無垢は、私たちにさらに別のメッセージと別のコードをもたらしからである。それぞれが両性であり、二つの性をもちながら、二つの性は仕切られており、たがいにコミュニケーションを行わない」²⁹。この意味では、雀蜂が花弁の中を動きまわることこそが、蘭の生殖成就のための一条件となる。だからといって雀蜂は、生殖の働きにとって必須ではなく、場合によっては風や他の昆虫、動物を通じて受粉は可能である。ではこの条件とは、何を意味しているのか。それは必要条件でも、十分条件でもなく、生殖を実現するための複合的働きが連鎖的に継続されるためのきっかけの一つという意味合いにすぎない。にもかかわらず、適切な時期と場所で、雀蜂が動き回ることによってそうした働きのネットワークを駆動させてしまう。

²⁸ G.ドゥルーズ、F.ガタリ：『アンチ・オイディプス 下』（宇野邦一訳、河出文庫、2006）、130 頁。

²⁹ G.ドゥルーズ、F.ガタリ：『アンチ・オイディプス 上』（宇野邦一訳、河出文庫、2006）、135 頁。

さらには雀蜂が寄り付きやすいように、蘭自体の形態の獲得には進化の過程が隠されている。花の形や色、器官が、現在の形をとどめていることの背後には膨大な進化史があり（共進化）、決して思い起こすことのできない集合的記憶の再編がここでも明確な機能性の出現の背後に潜んでいる。

蘭の形態、色彩、フェロモンは雀蜂の飛翔運動をそこへと収斂させる焦点を作り出すかざりで、雀蜂の食糧確保にかかわる働きのネットワークの一部に取り込まれており、そのネットワークから見れば蘭は雀蜂の食糧確保という現実性を形作る要素である。しかしその真裏で、雀蜂は蘭の生殖の働きの一部となっている。雀蜂と蘭の現実性は、共有されることがないまま、相互の輪郭を変動させ、交差させる。「蘭は雀蜂のイメージやコピーを形作ることによって自己を脱領土化する。けれども雀蜂はこのイメージの上に自己を再領土化する。とはいえ雀蜂はそれ自身蘭の生殖機構の一部分となっているのだから、自己を脱領土化してもいるのだ。しかしまた雀蜂は花粉を運ぶことによって蘭を再領土化する。雀蜂と蘭は、非等質であるかざりにおいてリゾームをなしているのである」³⁰。

子供がふと蘭の花に手で触れたり、鳥の糞が花卉に落ちたりすることも、それとともに生殖のネットワークを駆動させてしまうことがある。その意味では、蘭の生殖のネットワークの延長上からは、決して雀蜂の食糧確保のネットワークは出現しないし、何らかの別のネットワークを指定したりもしない。むしろ「蘭—生殖」という現実の成立には、いつでも「雀蜂—食糧確保」、「子供—遊戯」、「鳥—排泄」といった別の機能性のネットワークが、ひとつの現実の裏側で立ち上がり、作動しうる。ここで問われているのは、働きを徹底的に貫く現実の観察である。巣に帰り、休息している雀蜂の集合は、物理的距離として蘭とは遠く隔たっており、認識される雀蜂の集合にとって蘭は境界の外部である。にもかかわらず、蘭の生殖の働きを駆動させる潜在的要因として雀蜂の集合はいつでもその働きと現実の境界線上にある。物理的境界とは異なる境界の設定が問題になっているのは確かである。

この時点で先に論じた分子的運動の「動的編成／偏り」は、働きの境界の形成へとパラフレーズされていることが分かる。ドゥルーズ・ガタリが取り上げる「雀蜂と蘭」、「馬と人間と鎧」、「アマゾネスと弓と草原」といった事例は、固有な境界設定（領土化）の事例であり、それぞれが固有の働きのネットワークを駆動させることで現実の境界を浮き彫りにする。乗馬という行為そのものによって馬と人間と鎧は、その行為の継続に参与するかざりで、その現実を組み込まれている。そしてその場面で、乗馬という行為そのものの働きから、馬と人間と道具のかかわりが記述されねばならない。たとえば鎧の装着具合の悪さが、馬の運動速度を変化させ、走行パターンをゆがませる。そのこと自体に気づかない人間が鞭の強さを強めることで、走行パターンがさらに歪なものに進んでいく。あるいは走行パターンの違いを咄嗟に察知することで鎧の歪みを修正する。こうした行為のさなかで、現実の度合いの変化、そこからの現実の分岐が起こる。つまり乗馬という行為そのものが維持できずに落馬したり、あるいは乗馬という現実が透明になることで射的という別の行為が接続可能になる。こうし

³⁰ G.ドゥルーズ、F.ガタリ：前掲書、上巻、2010、29頁。

た場面で問題になるのは、意味的つながりや論理的つながりではないし、ましてやエディプスのような物語的つながりでもない。本来、行為のさなかで起きていることは、乗馬している人を外から眺める観察者にとってほとんどよくわからない出来事である。

こうした現実記述を焦点にしようとする、どのような働きのネットワークに視点を入れて記述を行っているのかという問いが前景化することは確かである。現実はその記述とは異なる。そのため記述をどんなに詳細にしようと現実そのものは無限に遠退いてしまう。こうした言い掛かりに近い懷疑の設定は、哲学的認識論の習い性となっており、アンリにも典型的に見られた。生とその記述、行為とその記述、現実とその記述には、そうした困難は不可避でもある。にもかかわらず、記述のスタイルを変更させ、概念を更新することで、現実そのものとの距離感が変化することはある。それは現実を説明するというよりは、記述を介して現実を出現させてしまうことに近い。観察を排したそれ自体と、その記述、さらには外的な位置から認識される観察、それら相互の区別自体を観察すること。こうしたことで観察は高次化され、セカンドオーダーからメタ記述へと至る。これはルーマンがとったシステム記述の戦略のひとつであり、現象学的にはブレンターノが心的対象の発見にも用いていた。これだけでも確かに現実の異なる位相を取り出すことはできる。しかしドゥルーズ・ガタリが企てようとしていることは、こうした観察の高次化や序列化という知的操作に含まれる理性的作為を端的に取っ払ってしまうことで、現実とその記述に何が起きてしまうのかという可能性の問いでもある。ここには、高度化や序列化という現実の発見の方法それ自体が、偏った現実の一局面にすぎないのであるから、それにより多大な経験が見過ごされてしまうという警鐘が含まれている。

ドゥルーズ・ガタリが概念的戦略とともに、ここで取り上げた試みを実行したことは確かである。しかし今や問題はこの先にある。単純に考えてみても、彼らの議論には現実の境界の出現、境界の変動、境界の消滅にかかわるシステムの機構が見出せない。動的編成の条件や作動が継続するための経験の内側からのシステム記述の手がかりが見出せないのである。そのため、現実に起きた特異的事例を取り上げることはできても、現実そのものの新たな立ち上げというプロセスの記述には程遠い印象を受けるのである。ドゥルーズは、あるインタビューにおいて「ガタリと私がリゾームと名付けたものは開かれたシステムの一例に他ならない」³¹と述べている。そのさいドゥルーズが想定しているのは、線型的な因果性を放棄することから始まるシステム記述である。その意味でもこの「開かれたシステム」が、どのように機構化されるのかが、働きのネットワークを考えるうえでの最重要課題となり、1970年以降、新たなシステムの形として導入されたオートポイエシスとの接点が生まれることにもなる。たとえばその開発者の一人であるマトゥラーナは、「生命システム一般、とりわけ神経

³¹ G.ドゥルーズ:『記号と事件—1972 - 1990年の対話』(宮林寛訳、河出書房、1992)、「千のプラトンを語る」57頁以下参照。

システムは、環境を制御するという進化を経て現在の形態へと到達したが、これらのシステムはそもそも環境を制御するようには作られていない。そのため私たちはこれらのシステムについて語りうることだけを語ることができる」(H.R.マトゥラーナ)³²と述べている。環境を制御するために進化が進んだと見るのはあくまでも進化に意味を見出そうとする外的観察者である。

しかしそのシステムを子細に調べてみると、そこには環境制御という機構そのものが神経系の仕組みからは見出せないことが判明したのである。生命というシステムは、それ自体環境に適応するという機構を備えていないにもかかわらず、環境に適応しているようにしか見えない。この両者の隙間に、システムと環境そのものの特質があるとして課題設定したのがオートポイエーシス構想である。働きとともに出現する現実システムの成立と同時に、しかも不可分に起こる。しかし問題は、このシステムそのものの機構の解明なのである。

³² H.R.マトゥラーナ、F.J.ヴァレラ:『オートポイエーシス 生命システムとはなにか』(河本英夫訳、国文社、1991)、239 頁参照。